

掘りday  はちのへ  
—八戸市埋蔵文化財ニュース 創刊号—



埋葬された縄文時代後期の甕 牛ヶ沢(4) 遺跡

### はじめに

近年、発掘調査の現地説明会に多くの方々が足を運んでくれるようになりました。しかし、当日は仕事の都合などで、遺跡を見たくてもみれなかったという人もいます。

そこで、発掘調査の成果をより多くの方に知っていただき、さらには調査担当者の発見の喜びや悩みなども伝えたいと考え、当誌の発行を思い立ちました。

誌名は、皆で無理やり出し合い、その中から『掘りday はちのへ』が、遺跡を掘ることと休日のholidayが重なり明るい発掘調査

現場がイメージされるということで決まりました。後の参考のため見事落選した誌名を掲載しておきます。

土中の文化財、土からのメッセージ、発掘伝言板、穴掘りからの一言、いにしえからのメッセージ、こりかわ、掘りdayたいむず、今日は掘りday、掘ってみま専科、はちのへ埋文ニュース、ここ掘れ！八戸、過去・未来への輪

次号には、発掘調査に従事したおぼさんの声や小さく割れて出土した土器が完全に復元されていく様子なども紹介する予定です。

# 八戸城（はちのへじょう）

八戸城跡は、馬淵川下流右岸の標高約20mの段丘崖を利用して築かれています。八戸藩南部家2万石の居域として、寛文4年（1664）八戸藩創設から明治4年（1871）の廃藩置県までの約200年余り城があった場所です。城は天守閣のない陣屋形式のものでした。八戸藩創設以前は、盛岡藩の代官所が置かれていた場所でもありました。八戸の中心街は八戸城を起点に形成されています。本丸跡には三八城（みやぎ）神社、三八城公園等、二の丸跡には八戸市庁舎、八戸市公会堂、南部会館等が位置しています。

八戸城の御殿は、盛岡藩の代官所であった建物を譲り受け、諸役所等を増築したものとされています。文政10年（1827）になり、御殿の新規普請が決まり、翌年4月から古御殿の取り壊しが行われています。天保元年（1830）に「御殿開き」として新築祝いを行っていることから、新御殿が2年程で完成したことがわかります。三八城公園整備に伴い、平成6年度から毎年発掘調

査が行われています。これまでの調査地点を八戸市指定文化財の「古御殿御絵図面」と照合して見ると、御花畠の場所にあたっていることがわかります。

今年度報告書に収録した3つの遺構は、城内のゴミ捨て場だったところで、多数の遺物が出土しています。最も出土量が多いのは陶磁器です。陶磁器の原料である粘土及び陶石（胎土）や、陶磁器の表面を覆うガラス質の層（釉薬）、絵付けの特徴から産地を、器形や絵付けの特徴から製作された年代を知ることができます。産地を数量順で見ると①肥前②瀬戸・美濃③京・信楽④在地（東北地方諸窯）の順となっています。①と②の二大生産地の製品で実に8割近くを占めています。出土遺物の年代から、3つのゴミ捨て場は古御殿が取り壊される文政11年（1828）以前の18世紀後葉から19世紀前葉のものであることがわかりました。（藤田俊雄）



八戸城内で使用された陶磁器

## 発掘と女性

八戸市の発掘は女性に支えられています。というのも発掘にたずさわる作業員の95%が女性、その多くが主婦だからです。発掘は主婦向きの仕事なのかもしれません。暑さ寒さにさらされながらスコップを使ったりするのはかなりきついで健康管理が大切です。それは食事を含めて他人まかせにせずしっかり健康管理する家庭の主婦でなければ長続きしないのでしょう。また発掘は先を読みつつ作業しなければなりません。

それは夕食のメンバーや明日のお弁当のことを推測しながら買物・調理・後片付けする主婦の得意分野です。さらには発掘の細かな技術は先輩作業員から後輩へ教えることが多いものです。これもまた子供の勉強をみている主婦にうってつけです。このように主婦という他のどんな職業より幅広い能力をバランスよく働かせなければ務まらない暮らしをしている人達こそ発掘は支えられています。（渡 則子）

## 新井田古館遺跡（にいだふるだて）

新井田古館遺跡は、八戸市の中心部から直線距離で約3kmの地点に位置し、遺跡は新井田川の下流域右岸、標高4～10mの低位段丘上に立地しています。この遺跡は古くから館跡として知られ、東西250m、南北350mの遺跡範囲内に中世の土塁と堀の痕跡も認められます。伝承によると①根城南部氏の一族であった新田（にいだ）氏が新田城に移る前の居館であった。②新田氏の一番家老が居住していた。③新田氏の菩提寺である対泉院の隠居がいたというように、いずれも新田氏と関係する館跡と考えられています。遺跡の南方約750m程の距離には新田城（県道跡登録名：館平遺跡）が位置しています。

新井田第一土地区画整理組合の土地区画整理事業に伴い、平成6年度から11年度までの予定で発掘調査が行われています。これまでの調査により、縄文時代早期末葉（今から約6,000年前）から近代に至る複合遺跡であることが明らかとなりました。

この遺跡の特徴は、①複合遺跡で、中世には城館が構築され遺構の密度が濃い（まさに穴ぼこだらけ）②1,000～1,500㎡の調査面積でも平箱50箱以上と遺物量が多い③水位が高く、堀跡や井戸跡の調査はまさに泥と水との闘い④近世には屋敷はずれに墓が構築されており、これまで42体分の人骨が検出され、まさに骨だらけといった状況です。



墓から検出された江戸時代の人骨

墓は中世に構築されたと考えられる土塁側から検出された例が多く、土塁の法面を掘り込む形で、北側(奥壁側)の深い底面に遺体を折り曲げた状態で埋葬されています。副葬品には六道銭、ハサミ、火打金、柄鏡、キセルなどがあります。DNA鑑定により埋葬者の血縁関係も徐々に明らかになるでしょう。

六道銭：死者を葬る時、三途の川の渡し賃として棺に入れる銭

### 〔現地説明会〕

8月22日には、新井田古館遺跡発掘現場において一般市民を対象とする現地説明会を開催しました。当日は約80人の考古学ファンが飛鳥時代の竪穴住居跡や中世の堀跡、近世の墓などの遺構、土器や陶磁器などの出土品を見学したり、担当者の説明を聞きながら郷土の歴史に理解を深めていました。

昨年度に引き続いて2度目の現地説明会でした。区画整理事業のため調査終了地点は掘削・整地され、あっという間に家やアパートが建ち並ぶため、地元の人達もその移り変わりの速さに驚いている様子でした。

平成10年度も隣接地を継続して発掘調査する



現地説明会風景

予定です。八戸地方でもあまり明らかになっていない中世城館や、近世の集落と屋敷墓の関係を知らうでの遺構・遺物の発見が期待できそうです。

（藤田俊雄）

## 丹後平古墳（たんごたい）

丹後平古墳は、今から約1,400年ほど前に造られた飛鳥時代の終わりから奈良時代にかけての古墳です。遺跡の場所は根城地区にある標高90m前後の丘陵地。現在、盛んに街づくりが行われている八戸ニュータウンの一角に残されています。

昭和61年秋、我々は八戸ニュータウンの開発に先だち、丹後平(2)遺跡という縄文時代後期の集落跡の調査中でした。場所は古墳からやや下がった緩斜面。発掘の終盤、斜面の上の方に遺構があるかどうか調べるために周辺にトレンチ（試掘溝）を入れることになりました。その時、あるトレンチから長方形の土壇がみつかり、メノウ製の<sup>まがたま</sup>勾玉が一個顔を<sup>どこう</sup>出したのです。土壇は<sup>なきがら</sup>亡骸を納めた古代の埋葬施設であることがわかり、後に「丹後平古墳」と名付けられる遺跡の存在がこの時点で明らかになったわけです。

昭和33年、同じ丘陵にある鹿島沢古墳を慶応義塾大学が発掘調査して以来、青森県内では久しく遠ざかっていた古墳の発見でした。早速、62年と63年に本格的な発掘調査の手が入り、期待どおり数多くの古墳や土壇、そして様々な遺物がみつかりました。出土品のなかでも、最も大きい古墳からみつかった<sup>しがみしきざんるいかんどう</sup>獅嚙式三累環頭大刀の<sup>つかがしら</sup>把頭は、北日本を代表する古墳としての歴史的価値を一層高めています。



獅嚙式三累環頭大刀の把頭

平成9年度に発掘した場所は、昭和時代に調査した区域の西側隣接地です。周溝とよばれる円形の溝をもつ古墳15基と、長方形の土壇1基を新たに発見しました。古墳の形は本来、お椀を

伏せたような円墳です。現在は墳丘が削られてしまい、直径10m、幅1m前後の周溝と亡骸を納めた埋葬施設が残っています。

古墳からは、腕輪、玉等の装身具類、土器、武器類や馬具などがみつかっています。



古墳調査風景

土壇は、亡骸を置く墓穴の底に拳大の石を敷きつめています。長方形に敷きつめられた石敷きの南東側からは首飾りに使われていた勾玉等がまとまってみつかっています。これから推定すると、遺体は頭を南東側、足を北西側に向けて納められていたものでしょう。また土壇の手前には、墓前での儀礼に使われた土器が並んでいます。器には何が供えられていたのでしょうか。故人へのたむけの気持ちが遺物の状況からうかがえます。

（宇部則保）



土壇

土壇：地面を掘りくぼめてこしらえた墓穴  
獅嚙式三累環頭大刀の把頭：刀の把先の装飾が獣面の図柄と三個の環を組み合わせたものからなっているもの。  
金銅製。

## 大仏遺跡（だいはつ）

平成9年度八戸市教育委員会では、東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査を3遺跡で実施しました。

大仏遺跡は、馬淵川と浅水川に挟まれた舌状に張り出した標高15～25mほどの低位段丘に立地しています。現在ある県立八戸西高等学校の西側になります。今回の調査では、緩斜面に古代の竪穴住居跡・溝跡・通路跡・土壇などがみつかりました。また同遺跡周辺は、尻内館（沼館愛三著「南部諸城の研究」）ともよばれ中世の館跡があった場所と考えられています。発掘調査により一部斜面を削って平坦面をつくり出していることがわかり、掘る立柱建物や出入り口のある竪穴建物跡がみつかりました。その周辺から瀬戸産おろしざら卸皿や茶臼が出土していることから、中世に何らかの施設があったことが考えられます。



今回の調査で注目されるものは、十数棟確認された竪穴住居跡のひとつから出土した青白磁皿です。同じ住居から土師器甕の破片が数点出土しています。青白磁皿は、青磁・白磁同様中国で焼かれ日本に入ってきた磁器で、県内では古代の遺構から出土したものは、黒石市高館遺跡の竪穴住居跡から出土した白磁皿が唯一確認されているだけです。古代の青磁・白磁は、国内では九州の太宰府・鴻臚こうろや京都の平安京などで多数確認されており、大仏遺跡出土の皿の特徴と類似するものは、10世紀後半から11世紀

前半と考えられています。

同じ竪穴住居出土の土師器の年代は、現在のところ10世紀後半以降と考えられており、今回の青白磁の出土により、地元の土器（土師器）の年代を検討する上で貴重な発見となりました。



青白磁皿（左上）と土師器

### 〔現地説明会〕

9月13日(土)大仏遺跡発掘現場において一般市民を対象とする現地説明会を開催しました。当日は200人を越す市民が訪れ、尻内地区の古代の人々の暮らしや歴史を想像しながら熱心に説明を聞いていました。



大仏遺跡は平成10年も継続して発掘調査を行う予定です。八戸地方ではまだ明らかになっていない11世紀から12世紀にかけての遺物・遺構の発見が期待でき、平安時代の終わり頃の八戸地方の人々の暮らしが少しずつ明らかになっていくことでしょう。 (大野 亨)

## 西長根・松ヶ崎遺跡（にしながね・まつがさき）

西長根・松ヶ崎遺跡は、市の中心部から南東へ約4km離れた地点に位置し、新井田川と松館川に挟まれた丘陵部に所在します。青森県の遺跡台帳には西長根遺跡と松ヶ崎遺跡の2カ所の遺跡として登録されていますが、数度の発掘調査により縄文時代中期を主体とする一つの遺跡であり、全体の面積が238,000㎡にも及ぶことがわかりました。西長根地区はこれまでに約2,000㎡の調査をおこないました。その結果、竪穴住居跡34棟、土壇70基、土壇墓7基、屋外炉1基が検出されました。その他、北側斜面から遺物捨て場が確認されています。松ヶ崎地区は約400㎡の調査をおこないました。その結果、竪穴住居跡39棟、土壇9基、屋外炉4基が検出されました。わずか400㎡（120坪）に竪穴住居跡が39棟も発見されたことは、何度もこの場所で住居の建て替えがおこなわれ長期にわたって人々が住み着いたことが考えられます。また、竪穴住居跡から成人と考えられる人骨も1体出土しました。まだ調査を行っていませんが、この遺跡には貝塚も確認されています。一般的に縄文時代前期から中期にかけて遺跡（集落）は、三内丸山遺跡のように巨大化する傾向が見られます。青森県内にもこのような遺跡は数多く確認されています。西長根・松ヶ崎遺跡もそのひとつで、東北北部で発生した円筒土器と、東北



松ヶ崎遺跡

半から発生してきた大木系土器と一緒に出土する貴重な遺跡であります。また、この遺跡周辺には、縄文時代早期の赤御堂遺跡、前期の一王寺遺跡、後期の風張遺跡、晩期の是川遺跡など、著名な遺跡が数多く存在しています。

（村木 淳）



西長根遺跡

### ある一日、そして一年

文化課に来て早々、私は試掘に連れていかれた。作業が始まると作業員さん達は、先輩職員の指揮の下、巻尺やビニールテープを駆使して発掘する範囲を決めていく。掘り下げる段階になり、見ているしかなかった私もこれならと思えばスコップを手を取った。が、わずか、一時間後には腕はパンパン、腰はギシギシ、「大丈夫です」と言いながらも翌日の筋肉痛を覚悟していた。その一方、作業員さん達は、時には冗談交じりの会話をしながら、時には「タダセー（立って腰を休めなさい）」と若者をいたわりながらも手際良く掘り進めていく。その姿は作業終了の合図まで変わることはなかった。翌朝、目覚まし時計にせかされてやっとの思いで布団から這い出た私は、重い体を引さずるように出勤した。あれから一年、時々遅刻しそうにはなるけれど、引きずってくる体はいくらか軽くなった。

（藤谷一徳）

## 風張遺跡の環状集落と発掘報告書の刊行

風張遺跡は、昭和63・平成元・3・4年に発掘調査が行われ、縄文時代後期後葉（今から約3千年前）の竪穴住居跡や土壙墓などが多数検出されました。また、出土遺物も大量で、精巧な文様で飾られた大小様々の土器を並べて見ていると、是川に住んだ縄文人のエネルギーが伝わってくるような気がします。

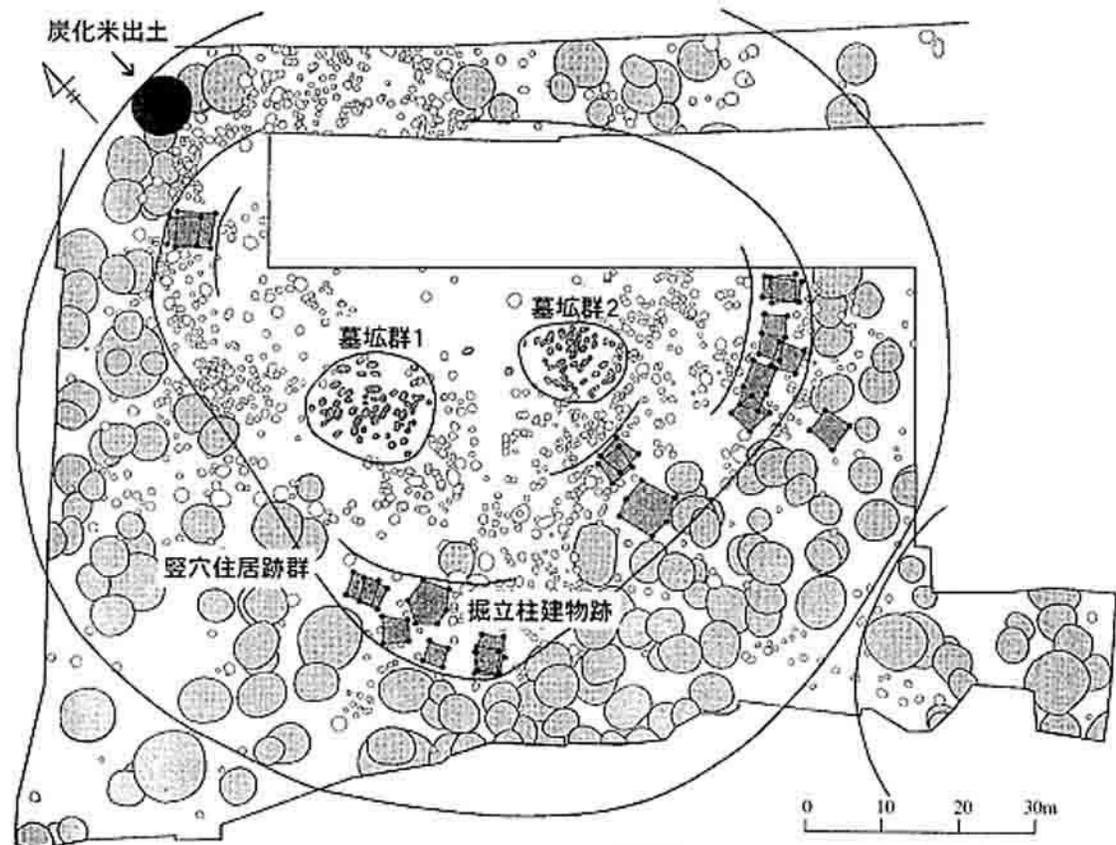
さて、風張遺跡の大規模な調査が一段落した平成3年の冬、各年度ごとの平面図を繋ぎ合わせて元同僚の藤田亮一さんが「遺構の配置が岩手県の西田遺跡と同じ環状を構成することがわかった」と言って図面を見せてくれました。なるほど、お墓を中心に土壙や掘立柱建物跡が円を描くように配置され、さらにその外側を110×120mの範囲に竪穴住居跡がまわっているではありませんか。

村の中心にお墓を設けていることは、祖先の霊の宿る場所が当時の人々にとって最も大切であったことを示しています。現代では、このような考えでまちづくりをおこなうことはまずないでしょう。

このように、縄文時代の村の全貌が明らかとなった例は、全国的にみても余り多くなく、当時の集落を研究するうえで極めて貴重な調査成果が得られました。しかし実は、遺跡の発掘の最大の目的である調査報告書が、あまりに遺構や出土遺物が多かったため整理が追いつかず、まだ一部しか刊行されていません。よく研究者から報告書は？と聞かれ肩身の狭い思いをしています。風張遺跡の出土品を国の重要文化財に指定するため調査に来た文化庁の職員の方々からも同じことを聞かれました。

開発事業に伴う発掘調査は、「記録保存」とも呼ばれており、一般的には発掘成果を報告書にまとめ研究資料として残すことを条件に開発が認められています。従って、報告書が出ないうちは事業は終了していません。

風張遺跡は、縄文文化を解明するうえで重要な遺跡として充実した報告書の内容が求められており、このことは発掘担当者の醍醐味でもあり、当分続く苦悶でもあります。（工藤竹久）



風張遺跡遺構配置平面図

